

# 猛暑の夏のスタミナ野菜類

この夏は猛暑である。消費者も夏バテ気味であるが、一方で野菜生産も一連の天候異常によって生育にダメージが出ており、市場相場も暴騰気味だ。夏場には、体力をつけるためにスタミナ野菜類の消費が活発化するものだが、今年の場合は高値である。入荷が少ないためなのか、需要が旺盛なのかは

判断が難しいものの、夏には夏の野菜を常に強気で売っていくことが必要だ。また、必ずしも夏が生産のピークではない品目でも、夏向き野菜としてアピールしたいものもある。何もせずとも高値販売が約束されていることに油断してはならない。

## ニンニク

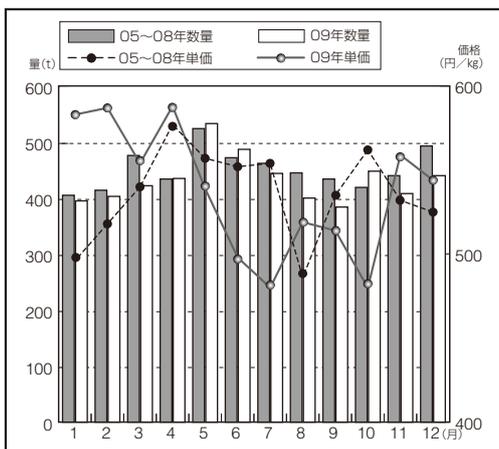
【概況】 今夏は国産の不作で高騰。輸入品を敬遠する需要に安定供給を

東京市場のニンニクは、かつて年間入荷量が7000t程度あったが、中国産の激減によって08年には5000tを割り込んだ。平均単価が430円から08年に700円以上に高騰したことから国産が増産し、09年には5%ほど入荷が増えて価格高騰は沈静化した。春から出荷が増えているわけではない。中国産は一時減ったが、07年以降の入荷量はほぼ一定で、シエアは53%ある。

### 【今後の対応】

国産の不作は春先からの天候不順によるものだが、ここ2〜3年、全国各地で新規の産地を含めてニンニクの増産意欲は強い。中国産の需要は、加工向けと一部の業務用に限定されつつあり、今年の夏のように国産の入荷が減ると、途端に高騰する構造になっている。中国産の需要をどう代替していくかが、国産ニンニクの課題だ。キロ単価が200円でも採算の合う栽培法や商品開発が待たれる。

【背景】 ニンニクといえばスタミナ野菜の代表格だが、その消費形態から見ると、冬場にも需要は多く、とりわけ夏バテ対策の野菜というわけではない。しかし今年の場合、本来増えるべき春に入荷が少なく、需要期である7月に至っては前年同月より15%も減少し、キロ単価は43%も高くなった。この強い引きは業務用需要が先導しているものだが、この需要に対して中国産で対応できる部分は限られており、国産の出荷減が大きく響いた。



## オクラ

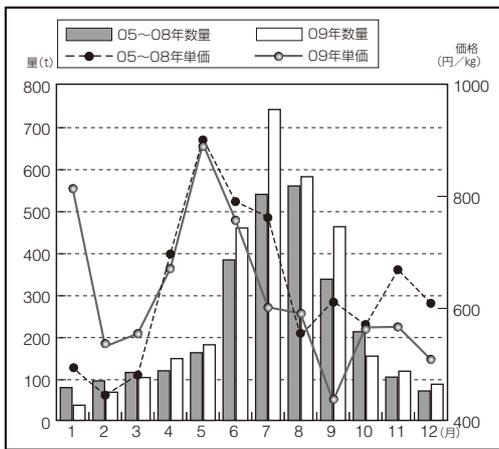
【概況】 天候不良で6月以降に高騰。輸入ない時期にマーケット獲得を

東京市場のオクラは、近年、鹿児島、沖縄、高知などのトップ3産地や九州産地がともに増産傾向。06年は入荷が前年比で25%も減ったが、翌年以降は増勢で09年には近年にない入荷量となった。入荷が増えた割に単価が堅調推移しているのは、国産の増勢により単価の安い輸入品の割合が減ったためである。熱帯性の野菜であるため6月から夏場にかけてピークを迎え、夏野菜としてすっかり消費者に定着している。

### 【今後の対応】

本来、供給が安定しているはずの夏場の西南暖地に、今年は思わぬ被害が出た。しかしこの時期は最も需要が強いことから、関東、東北に大型産地が育ってもいい。実際に関東では群馬、東北では秋田が普及拡大しようとしている。群馬ではとりたてのシャキっとした食味を保持するためにMA包装を採用するなど、アピールに余念がない。地場産が増えた分、高知などの周年型産地が影響を受けるが、夏場はもっと供給が厚くてもいいだろう。

【背景】 今年のオクラは、本来増えてくるはずの6月に入荷が少なく価格が高騰。7月に入っても入荷は前年比で36%も少なく、単価は46%も高騰した。主産地である西南暖地が、春からの低温や豪雨などで被害を受ける一方、フィリピン産など輸入品の入荷がほとんどない時期に入ったためである。本来は夏場に供給体制が厚いはずだが、これほどの入荷減は想定外だったようだ。近年、消費者に人気が高い、ネバネバ系野菜の代表格だけに、影響が大きい。



# 今年の市場相場を読む

猛暑で生産増を誘導か。産地の北上で期待される東北地方

## ニガウリ

【概況】

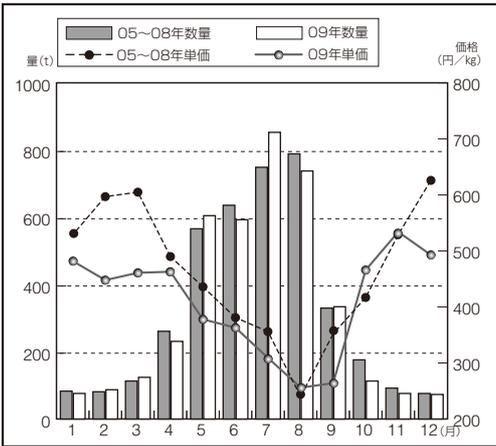
東京市場のニガウリは、「ゴーヤ」の日（5月8日）のある5月から増え始め、ピークは6〜8月、9月になるとガタッと入荷が減るといふ、典型的な夏の野菜である。産地は圧倒的に南に多く、主産地の沖縄に、宮崎、鹿児島、長崎といった九州各県が続く。近年の温暖化の影響もあるのか、西南日本ならどこでも生育できるが、一方でピーク時には群馬や茨城など関東産の数量もある。産地が明らかに北上している。

【背景】

ニガウリは冬場の入荷が徐々に増えている。業務用でも一般家庭でも周年需要が定着しつつあるからだが、今年に限っては年明け以来前年実績より入荷が少ない状態が続く。売り出しのタイミングである5月にはなんと3割以上も減った。天候不良の影響であり、一番の夏の出荷が心配されたが、実際には6月、7月と盛り返した。7月の入荷量は前年比5%程度の減、単価も8%高と落ち着いてきた。多産地化が幸いした。

【今後の対応】

九州ではゲリラ豪雨の影響が少なかったが、その後の猛暑はかえってニガウリの絶好の生育条件となったように、西南日本より温度が高かった関東産も順調だ。消費者にとっても夏バテに効きそうな野菜だけに、動きは好調。ほかの野菜類が高騰する中、サイフに優しい商品になっていく。今後の課題は関東以北の産地化である。温暖化の流れで、東北地方でも充分生産可能な品目になりつつある。障壁は思い込みだけだ。



## ニラ

【概況】

東京市場のニラは、入荷が増勢しつつも単価がついてきており、地味ながら成長品目だといっている。主産地の栃木、茨城とも周年体制だが、東北の季節生産のものが増える春に小さなピークがある。スタミナ野菜とはいっても、夏には入荷が減り気味になる。軟弱野菜だけに品質管理が難しいためだろう。ただし単価は夏場がいちばん底になるため、量販店などでは品揃えに熱心で、この時期は動きも大きい。

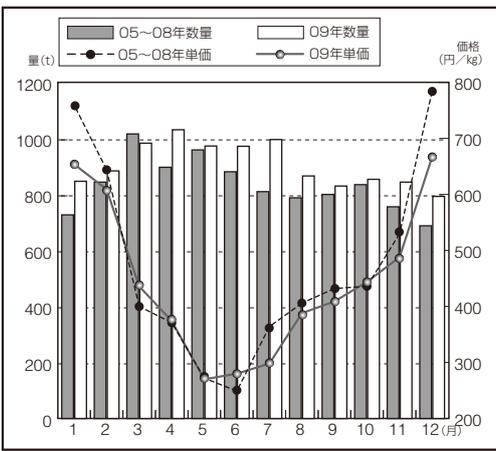
【背景】

今年の場合、年明けから前年比を割る入荷量で推移してきたが、5月頃からは回復基調となった。ただし7月は前年より1割程度の減少で、単価は33%も高くなった。キャベツやレタスなどが高値だった分、相場が引く張られたようだ。調理も簡単でメニューの幅も広いニラは、単価の安さも手伝って家庭需要が強い。このところの内食回復現象で、単価が安くて安定している野菜に人気が集まっている。ニラが増勢傾向にある理由だ。

内食回復で家庭用需要が活発。単価安い夏場に供給を厚く

【今後の対応】

ニラの最もおいしい季節は冬場だといわれる。最近では鍋物に欠かせない品目でもある。しかし今や周年需要が定着し、夏場でも作りやすく筋っぽくない品種が登場したことや、産地での予冷処理、保冷輸送も普及したことから、供給が安定してきている。一方で夏場のニラは単価の安さがウリである。この時期、業務用より家庭用需要のほうが強いために、そんな現象が起きる。夏休みの子供たちや、その母親のために、供給を厚くしたいものだ。



流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」、「レポート青果物の市場外流通」、「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。